

【談話】 大学入学共通テスト国語・数学の「記述式」導入は完全に廃止を
～「高大接続改革」の抜本的見直しを求めるとともに、萩生田光一文部科学大臣の辞任を強く求めます～

2019年12月19日
全日本教職員組合
書記長 檀原毅也

12月17日、萩生田光一文部科学大臣は、2021年度大学入学共通テスト国語・数学の「記述式」問題導入「見送り」を記者発表しました。11月1日に2021年度大学入試の英語民間検定利用を「延期」すると記者発表したことに続いて、「高大接続改革」の中心に位置付けていた「大学入試改革」の二本柱（英語民間検定利用と「記述式」導入）が「延期」・「見送り」となる事態となりました。これは、そもそも制度設計に無理があったにもかかわらず工程表ありきですすめられようとしていたものを、当事者である高校生が立ち上がり「中止」を求め、学生をはじめ保護者、高校・大学・予備校・大学の教職員、市民の支援が広がり、国会質疑や野党合同ヒヤリング等につながり、文科省に「延期」・「見送り」させたということが出来ます。

萩生田文科大臣は、「延期」の理由を「受験生の不安を払拭し、安心して受験できる体制を早急に整えることは現時点において困難」であるからとしています。さらに、①採点者を決めるのが来年秋から冬となるので現時点では実際の採点体制を明示できないこと、②採点の精度について「採点ミスゼロにすることまでは期待できず」「円滑かつ適正な実施には限界がある」こと、③自己採点について「採点結果との不一致を格段に改善することまでは難しく」大学選択の支障となる課題を解決するには不十分であること、をあげて、このような結論に達したと説明しました。

問題が解決しないまま2021年度の大学入試が実施された場合、受験生に経済的にも精神的にも過重な負担を与え、スムーズな高大接続とならないであろうことは容易に想像されます。遅きに失したとはいえ、当事者である高校生や関係者である教職員・保護者の声を受け止め、ギリギリの判断で「見送り」を表明したことは当然のことといえます。

これだけ多くの問題がある「大学入学共通テスト」を含め、「高校生のための学びの基礎診断」の押しつけなど、「高大接続改革」そのものが教育再生実行会議第四次提言で押しつけられたもので、まさに絵に描いた餅でした。それを無理矢理形にしようとしてきた矛盾が一気に噴き出したものです。「延期」・「見送り」しなければならないのは、そもそも「高大接続改革」に無理があったからです。あらためて高校生・大学生等のゆたかな学びを保障するための高校・大学教育施策を建て直すことが文科省には求められています。

萩生田文科大臣は、大学入試センターと十分協議した上で「延期」を判断したと述べましたが、この期に及んでやっと協議なのかと当事者からも怒りの声があがりました。今問題となっている点は11月1日の英語民間検定利用「延期」を発表した時点でも同じ問題がありました。以前から多くの教職員・高校生などが指摘していたにもかかわらず、「記述式」については見て見ぬふりで強行突破しようとしていたのです。萩生田文科大臣は、英語と同時に国語・数学の「記述式」も中止すべきであったにもかかわらず強行しようとしたことに重大な責任があります。高校生や保護者・教職員の不安と混乱を広げてきたことの責任をとり、萩生田文科大臣は即刻辞任すべきです。

全教は、「大学入学共通テスト」の国語・数学の「記述式」導入は「見送り」ではなく完全に廃止すること、英語民間検定利用も「延期」ではなく中止することを求めると同時に、高校教育や大学教育を歪ませる「高大接続改革」の抜本的見直しを求めます。

以 上